

第6回

日本体育・スポーツ・健康学会若手の会セミナー 報告書

成果の出なかった研究に意味はあるのか
方法論を超えて考える探究のリアル

日時：2026年3月20日（金）14:00～17:00

会場：早稲田大学早稲田キャンパス 16号館 403教室

方式：対面中心（ZOOM配信のハイブリッド形式）

1. 開催趣旨

研究は成果によって評価される側面が強く、若手研究者にとっては「価値がある」と見なされる業績の積み重ねがキャリア形成に影響を与えることもある。ここでいう「成果」という語には少なくとも三つの側面がある。学術的・社会的価値のある新しい知見が生み出された学術的成果 (A)。その知見が学術論文などの形で公表・出版される客観的成果 (B)。そして、その研究結果に統計的有意性が認められた統計的成果 (C) である。本来、研究活動の目的は(A)に置かれるべきであるが、現実には(B)によって評価され、さらに(B)が(C)に依存するという構造が存在している。このため、若手研究者ほど(C)の達成、すなわち「有意差を出すこと」を目的化せざるを得ない状況にあり、結果として(A)の本質的探究が損なわれていることが懸念される。

研究活動とは本来、意図した結果が得られない試行錯誤の連続である。仮説が棄却された研究や明確な成果が得られなかった試みの中にも、次なる探究を導く示唆や理論的再構築の契機が潜んでいる。それにもかかわらず、結果が出なかった研究は公表されにくく、学術誌や学会報告の場から排除されがちである。その結果、学術知の偏りや再現性の低下、同様の試行錯誤の繰り返しが生じている現状は、研究文化全体の健全性に関わる問題である。本セミナーでは、定量的研究・定性的研究・実践研究といった多様な方法論の立場から、成果に至らなかった研究や仮説棄却の経験を取り上げ、それに対する研究者自身の受け止めや考え方を含めて情報を共有してもらおう。登壇者には異なる研究領域から若手研究者を招き、それぞれの研究テーマと方法論（実験・調査・インタビュー・実践研究など）を紹介しつつ、成果の定義（A・B・C）に対する自身の考え方を含めて語ってもらおう。

後半では、参加者全員が自由に意見を交わすラウンドテーブル形式の討議を通して、研究領域や方法論の枠を超えて、成果をどのように捉え、どのような課題や葛藤を抱えているのかを率直に語り合うことで、研究活動の多様な価値を見つめ直す機会とする。この自由な情報交換を通じて、参加者一人ひとりが自身の研究実践を振り返り、異なる立場の研究者との対話から新たな視点や発想を得ることを目指す。本セミナーは、成果主義的な評価構造を超えて、探究の過程や経験そのものを共有し合うことで、研究の深化と新たな価値の創出を促す場としたい。

報告者

加納 岳拓（三重大学）

松元 隆秀（常葉大学）

豊島 誠也（広島大学）

コーディネーター兼コメンテーター

畑中 翔（東京都健康長寿医療センター）

宮尾 夏姫（奈良教育大学）

石村 広明（東京都立産業技術高等専門学校）

2. 第一部：各演者の報告等

シンポジストとして3名の先生にご講演いただいた。加納先生は体育授業の現象記述や協同的な学びといった実践研究、松元先生は統計学的アプローチや定量的研究、豊島先生は人類学的アプローチや質的研究、といったように研究における視点やアプローチが異なる立場から期待した結果が出なかった際の向き合い方や、研究デザインの重要性についてご経験を踏まえたお話をいただくことができた。例えば、加納先生からは仮説と異なる現象が起きたこと自体を「成果」と捉え、変数の捉え方や評価軸を問い直すこと、松元先生からは有意差の有無が全てではないことや効果量や信頼区間を確認し、生データの構造や分布に立ち返ること、豊島先生からは「問い」が現場と噛み合わない場合は問いを更新することやデータの再解釈や追加調査を通じて理論化を試みることなどがあげられた。

さらに、研究が行き詰まった際や、精度の高い研究を行うための具体的な考え方も共有された。成果の出なかった研究とは、調査の失敗そのものではなく、問いや方法論を考え直すことが求められている状況であり、それらをどう立て直すのかを問われていることが強調されていた。得られたデータから何が言えるのかを改めて検討し、解釈及び理論的枠組みを再構築すること、追加調査を実施すること、他者に相談しながら研究の枠組みをブラッシュアップすることなどが具体的にあげられ、研究分野やアプローチの違いに関わらず研究への向き合い方についてお示しいただいた。

3. 第1部：パネルディスカッション／第二部：グループディスカッション

パネルディスカッションでは、成果が得られなかった研究の受け止め方として、生データへの立ち返りや研究デザイン、問いの再検討の重要性が共有された。特に、三者の鬼遊びの事例を通して、結果ではなく変数の妥当性や前提そのものを問い直す研究の在り方が示された。また、データの再解釈や理論化の難しさに向き合いながら、アプローチの転換や追加調査による補完の必要性も議論された。さらに、限られた期間の中で成果を出すための戦略として、投稿先の選定や事例研究への転換、研究テーマの設定方法などが挙げられ、研究の面白さと評価との両立についても意見が交わされた。



写真) パネルディスカッションの様子

第二部では、対面にてグループディスカッションが行われ、活発な意見交換が行われた。閉会の際には、辻委員長から挨拶があり、本セミナー全体を総括する形で、各発表を踏まえつつ、多様な研究方法論や成果の捉え方・示し方について包括的な整理がなされた。



写真) グループディスカッションの様子

4. 集合写真

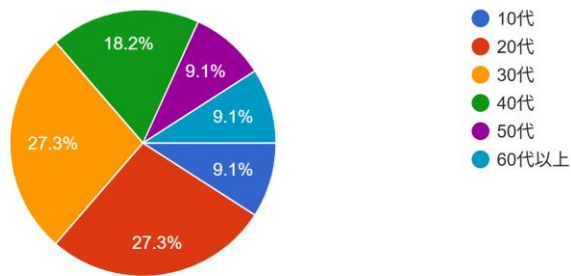


写真) 対面参加者および第2部オンライン参加者（宮尾委員撮影）

5. 第6回日本体育・スポーツ・健康学会若手の会セミナー参加者のアンケート結果

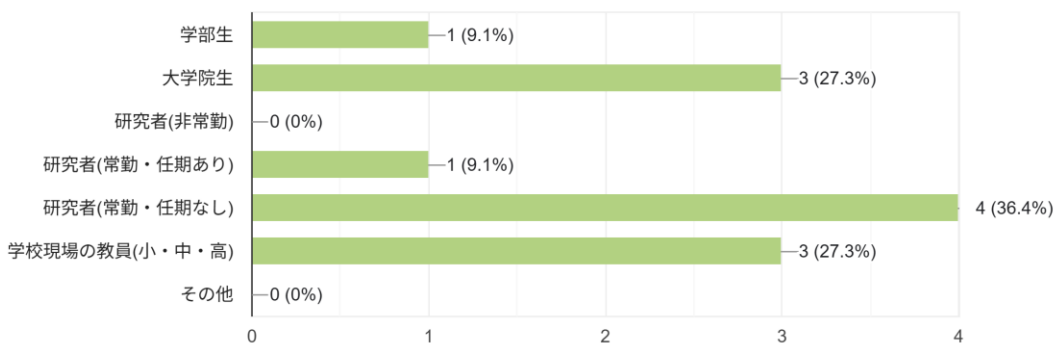
あなたの年代を教えてください。

11件の回答



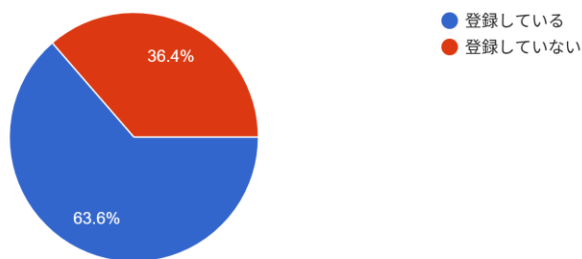
あなたのお立場(雇用形態)を教えてください。(複数選択も可)

11件の回答



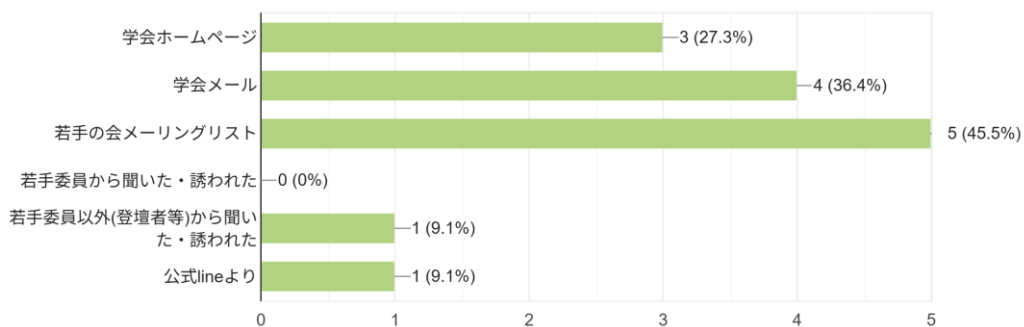
若手の会メーリングリストへの登録の有無を教えてください。

11件の回答



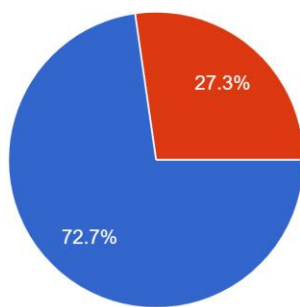
本日のセミナーをどのように知ったのか教えてください。(複数選択可)

11件の回答



本日のセミナーの内容はいかがでしたか？

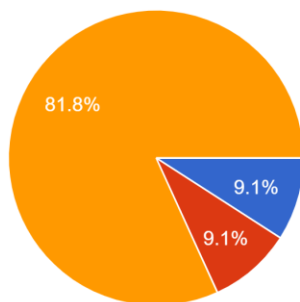
11件の回答



- とてもよかった
- よかった
- あまりよくなかった
- よくなかった

本日のセミナー全体の時間はいかがでしたか？

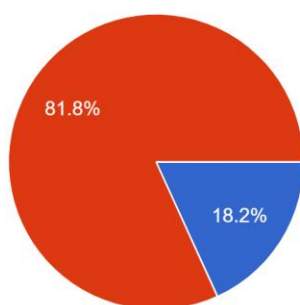
11件の回答



- 長かった
- やや長かった
- ちょうどよかった
- やや短かった
- 短かった

次回以降の「若手の会」の参加形式はどのような形式であれば参加しやすいですか？

11件の回答



- オンライン形式
- オンライン形式と対面形式のハイブリッド
- 対面形式

○本日のセミナーに関するご意見・ご感想をご自由にお書きください。

7件の回答 ※原文まま

- ・論文が通らなかったときの裏話が聞けて、今まで一本の道でしかなかった研究の見方が2本、3本と広がった感じがしました。既存の方法論からどう離れるか、異分野で使われているものを自分の分野にもってくることのお話は、新たな気づきをいただきました。文字を書く、文字を読む。そして、文章で面白さを伝える、というお話から自分の研究に取り組む姿勢を改めて振り返りました。先生方は自分が面白いと思った方へ進むとおっしゃっていて、勇気が湧いてきました。また、この会の続きが聞きたくなりました。本日はありがとうございました。
- ・研究はうまくいかないことの連続ですが、それを乗り越えるためのヒントをもらったように思います。
- ・本日は貴重な学びの機会をありがとうございました。現場の実践をベースに研究する身として、他者の研究プロセスの深部やリアルな悩みに触れられたことは大変勉強になりました。特に加納先生が仰った、エピソード記述における客観性は、読み手の脳裏に同じ風景が浮かぶかどうかであるというお話には、非常に強く頷かされました。単純化してこぼれ落ちるものを大切にする、質的研究の本質を再認識できた思いです。また、行き詰まりを失敗ではなく「問いの更新」と捉える視点にも救われました。本日得た視点を大切に、自分の実践を理論化していきたいと思います。運営の皆様、本当にありがとうございました。
- ・「成果の出なかった研究」を手掛かりに、各分野の気鋭の先生方のご発表を聞いたこと、またその内容から他分野の方法論について学ぶことができたこと、非常に有意義でした。ありがとうございました。
- ・研究を行うにあたり、ぼんやりとしていた部分が解決できたセミナーでした。非常に勉強になりました。
- ・同じ年代の方々の様々なお考えに触れることができ、学ぶことがたくさんありました。
- ・楽しみに参加登録して、よく見たら祝日開催。幼稚園がお休みで、仕事日ではないので参加できなかったです。いつも、若手の会といいつつも、イベントの日程は、若手に優しくないですね。残念です。

○次回以降の「若手の会」主催セミナーで取り上げて欲しいテーマがあれば教えてください。

3件の回答 ※原文まま

- ・研究費獲得のコツ
- ・今回のように研究をする上での具体的なお話を多面的な立場から聞きたいです。ありがとうございました。
- ・分野を超えて方法論を横断するようなテーマは面白いと気付かされたので、またご検討いただければ幸いです。